

ご法事を縁として

亡き人からの願いに生きさん

伊藤 元
いとうはじめ



伝道ブックス78

ご法事を縁として

—亡き人からの願いに生きん—

伊藤 元

目次

■ 法事を勤めるということ	1
■ 亡き人からの願い	5
■ 生きていく中での課題	7
■ 人間が最後に学ぶべきこと	12
■ 教えに出遇うかどうか	15
■ 柔らかな心をいただく	19
■ 私を育ててくれるもの	22
■ 私たちの心	27

■ 愛の正体……………	31
■ 自己中心的な考え方……………	36
■ 思い込みが破られる瞬間……………	39
■ 迷いをつくり出す心……………	43
■ 存在の尊さ……………	47

【凡例】

本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典』を指します。

■法事を勤めるといふこと

私たちは、人が亡くなると葬儀を執り行い、そしてその後、ご法事をお勤めします。そのご法事は、お墓の前ではなく、お内仏ないぶつの前で行います。それはなぜでしょうか。

人間の魂をあらわす言葉には、「魂こん」と「魄はく」という字の二つがあります。どちらも「たましい」と読みますが、「魂」という字は、人間の生存を司つかさどる、精神的なものを、また「魄」という字は、人間の生存を司る、肉体的なものをあらわします。よく、「大地に帰りました」といふ言葉を聞きますが、土に帰るのは「魄」の方です。大地に帰った魄を祀まつるところがお墓です。しかし、人間の精

神的なものを司る「魂」の方は、亡くなくても大地には帰りません。真宗では、浄土じょうどに還かえると言います。その浄土をあらわしたのがお内仏であり、お寺でいえば本堂の内陣ないじんです。まずは、このことを区別していただきたいと思えます。

お墓というのは、亡くなった人との思い出を偲しのぶところです。ですので、知らない方のお墓に参っても思い出すことは何もありません。亡くなったお父さんはいい人だった、お母さんは優しかったと、思い出を尋ねるところがお墓でしょう。お墓はお参りをする方が主なのです。そして、そのことをとおして仏様の教えをいただいでいくのです。

それに対してお内仏は、こちらから思い出をたぐるところではありません。亡くなった方からの限りない呼びかけに遇あうところですよ。

ご法事を、お墓の前でなく、お内仏の前でお勤めするということは、亡くなった人とあらためて出遇であい直すということです。亡くなった方がどういう願いで生きておられたのか、また自分にどんな願いをかけていたのか、そういうことに出遇うところでしょう。

ですから、お内仏の前でご法事をするということは、こちらから亡くなった方に「どうぞ静かにお眠りください」という、そういう行事ではないのです。また、世間では、「亡くなった人には、お経が一番のご馳走だ」などと言う方がおられますが、お経とは仏様の

教えが書かれたものです。亡くなった人は迷いの根がなくなり、仏様のもとに還ったのですから、むしろお経を聞かなくてはならないのは、生きている私たちなのです。南無阿弥陀仏なむあみだぶつもそうです。呪文でもなければ、亡き方に向けて称とえるのでもなく、仏様が私たちに「助かってください」と呼びかけているのです。その呼びかけに応答するのがお念仏でしょう。つまり、ご法事をお内仏の前で勤めるのは、亡き人からの願いに会い、また仏様の教えやその呼びかけに出遇う、大切なご縁なのです。

■亡き人からの願い

亡くなった親は、子どもや後の人びとにどのようなことを願っているのでしょうか。それは一言でいえば、「幸せになってほしい」ということでしょう。

ここで、仏教でいう「幸せ」というのはどういうことか、お考えいただきたいと思います。それは、いい暮らしをしてほしいということではないのでしょうか。人が生きるということは、苦しいことや悲しいことの中で悩むということです。それが全部なくなって人が生きるということはありません。ですから、亡き人が願っていることは、苦しまないようになってほしいということではなく、そうい